第 23 回年次大会予稿

義の訓練としての聖書 —聖書の検証可能性について—

The Bible as giving instruction for right living —about verifiability of the Bible—

安平哲太郎^{1*}
Tetsutarou Yasuhira^{1*}

¹ 未来創造研究所

Laboratory of Future Creation

〒305-0042 茨城県つくば市下広岡 1054-120

E-mail: yasuhira@zf7.so-net.ne.jp

現実を生きる我々にとって重要な事は、誤った行為を行った時、そこで要求されている正義がわかる事である。本論文では聖書をいくつかの特徴から「個別の著者の思惑や意図を超えて神が編纂され、人類の成長をテーマにした『神の創造による天地から新しい天地の創造』までの物語をもち、その中に現実に神が人間に要求する正義がちりばめてある書物」と理解した。その結果、現実に神が人間に要求する正義は現実に対する問題意識と聖書に記述される義との類似性によって、聖書の文脈から離れて現実の文脈の中での意味をもって見出される事が理解される。今回 3 つの具体例を用いて聖書を参考にしながら現実に神が要求する正義の流れが存在すること、およびそれに対する人間の側の応答である現実の流れが存在する事を明らかにした。最後に、このような神の働きを科学の原則に従いながら記述する事のできる方法論で議論できる場を、科学の方法論に習熟した学会がもうける必要性について指摘した。

The most important thing for us is that we can know justices demanded there by God when we did wrong conduct. In this paper we understood the Bible from some characteristics as the book which God edited beyond individual author's expectation and intention, has the story from the heaven and earth God created to the newly created heaven and earth under the subject of human's growth and inlaid in it with justices God demands for human in reality. Consequently justices God demands for human in reality can be understood to be found with meanings in a context of the real world away from a context of the Bible by resemblance between an awareness of the real world and instructions described in the Bible. This time using three concrete examples we made it clear that we can find flows of justices demanded by God in the real world with reference to the Bible and flows of reality which is equivalent to our response to them. Finally we propose that an academic society well versed in the scientific method should put a location for discussing God's intentions and operations.

キーワード: 正義, 聖書, 神, 現実の流れ, 正義の流れ, 現実に対する問題意識

Keyword: Justice, Bible, God, Flow of Reality, Flow of Justice, Awareness of Real World

1 初めに

筆者は昨年の情報知識学会全国大会で、社会変革の始まりと終わりを聖書の「私が始めであり、終わりである（ヨハネの黙示録 22 章 13 節）」という聖句を参考にあらかじめ定められたものとする事によって、黄金数を解とする方程式を社会変革に当てはめることができ重要な知見を発表できた。今までにもいくつか重要な仮説を立てる際に聖書の聖句を参考にしたことがあったので、今回聖書はどのような情報の集まりであり、そこからどのような知識を得れば我々の何に役立つのかを聖書の記述や今までの見方[1][2]を参考にして筆者の見方で検討してみた。

聖書の申命記 18 章 22 節に、
預言者が主の名によって語っても、そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られた言葉ではない。その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。

という言葉がある。これは預言者について語った言葉ではあるけれど、『主の言葉は必ず実現する』ということを前提としている。

聖書は今まで宗教の一分野の聖典として使われてきた。しかし、これからは聖書に書かれている言葉が実現可能な書物、したがって、実現しているかどうか検証が必要な書物として見直されるべきではないか？そして、そのことで一部の人たちが信じる宗教を超え、多くの人たちが聖書に書かれていることが実現可能であること、あるいは実現していることを確認可能な書物として安心して手に取ることが出来るのではないか？そして、また、聖書に書かれている実現可能な言葉とは何か？本論文ではこの事について考察する。また、本来なら科学の方法論によって立つ学会では神の名を用いて議論すべきでないが、筆者も考えているが、ここでは上記の問題を論ずるためにはどうして

も神の意図を問題とせざるを得ない為に神の名を用いる。そして、最後の考察で早急に科学の原則に従いながら、見えない（観測不能な）、生ける（一回限りの現象として現れる事の多い）神の意図や働きを議論できる場を設ける必要性を指摘する。

2 聖書の編著者

2.1 聖書のまとまりのよさ

新旧約聖書を構成する各書物の筆者は、それぞれお互いに連絡を取り相談して書いたわけではなく、古代イスラム社会やその後のローマの時代までに起きた事を個別に見聞きし、感じ、夢見たことを書き記しただけなのに、それらにある基準にもとづく聖で集めてみると個別の著者の意図を超えて、聖書の内容は全体を見渡し、将来を見通したようなまとまりの良さがある。

例えば、今までにも言われてきたことに、

1. 神による天地創造から始まり、新しい天地創造で終わる。

2. 旧約聖書で何人かの預言者が個別に待ち望んだ事がイエス・キリストに当てはまる。

がある。さらに

3. あたかも一人の人間の成長を表すような話や言葉が時系列的に並んでいる。

について考察すると「ヨシュヤ記」では、モーセの後継者のヨシュヤに率いられたイスラエルの民がカナンの地に入ると、神はイスラエルの民が現代でもとても許されない様な悪い風俗習慣に染まるのを心配して初めはその様な風俗習慣を持つ先住民族の聖絶を命じる。次に、聖絶を嫌がるようになるイスラエルの民をみて神はそれなら聖絶はしなくてもよいが如何わしい風俗習慣を持つ先住民族と関係を持つと言う。これは、まさに我々が幼児であった時には、大人の悪い事をして悪い事を教える周囲が悪いという事になるが、中学生くらいになると、周囲の悪に染まるお前が悪い、お前がしつ

かりしていればいいのだという事になる。すなわち、単に模倣をしていた状態から善悪の判断を求められるようになる。この事に良く似ている。

「士師記」になると、イスラエルの民に英雄が現れるようになり、その英雄がいる間は彼に従って悪から遠ざかった生活をするが、英雄がいなくなるとすぐ墮落をしそれを繰り返す。すなわち、私たちも高校くらいになると、指導力のある先生の時はしっかりと授業に集中するが、そうでないと授業に集中せずおしゃべりを始めるのに似ている。善悪の判断はついてもまだ自らを律する力がないからである。

「サムエル記」になると今度は仲間内から国王を求めるようになる。これは、私たちが大学に入る頃になると目的意識が出来て、先生に関わらず必要な科目はしっかりと聞くようになり、今度はグループを作って統率力のある仲間のところに集まるようになるのと似ている。

新約の世界は自立の世界ですべての人に悔い改めを初めいろいろな聖を求める。すなわち、基本的にはある人のやることは他の人達も出来、他の人達がやっている事はその人も出来なければならないという時代に入る。これは、社会に出ると誰かが代表を勤めるが、これは永久ではなく誰もが同じようにやる事が出来、誰もが統率する者と統率される者との両方の立場を経験し、理解出来るようになる。

最後に神は「エペソ人への手紙」で私達人間に霊的にイエス・キリストの身丈にまで成長する事を求め、「ヨハネの黙示録」では悲しみ、叫び、苦しみもないと言い、イエス・キリストは私はすぐに来ると言われる。これは晩年には人生の艱難辛苦を経験し尽くして全てを達観し、我々が若い人たちの重荷を共に背負いながら軽くすることに力を貸し続けて天に召されるのに似ている。要するに聖書全体を通して、人間の幼児期から老境までの成長の過程に相当する言葉が時系列的

に並んでいる。すなわち、聖書全体で人間の成長に関して意味を持っていることを示唆しているとする事が出来る。

4. さらに、神は聖書で目的と計画を持っている事を記述させ、この点において内容に矛盾はない。（エペソ人への手紙4章13節、使徒の働き20章27節）

5. カインとアベルの話（創世記4章）の中の羊、穀物、神を聖書で用いられている比喻として考えると、羊は人間、穀物は人間の知恵、神は永遠を表していると考えられ、人間を育てることは普遍性があり、人間の知恵は普遍性がない（いつまでも同じ知恵を使い続けていてはいけない）と言っていると理解することも出来る。

これらの事実から、1つの仮説を立てることが出来る。すなわち、聖書は「個別の著者の思惑や意図を超えて神が編纂された、人類の成長をテーマにした『神の創造による天地から新しい天地の創造』までの物語である」。

2.2 義の訓練としての聖書

テモテへの手紙 第二3章16節に「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です」とあり、さらに「それは、神の人が、すべてのよい働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです」とある。我々人間が生存する上で最も重要なのは、我々の行動が原因となって好ましくない結果が得られた時、その原因が分かることである。そのためには「神によって正しいと認められた行動」が分かる必要がある。なぜなら、「神によって正しいと認められた行動」が分かることによってそうしなければならないという『教え』が分かり、我々の行動がそこからずれている場合にはそうしてはならないという『戒め』が分かり、我々の行動が「神によって正しいと認められた行動」からずれている事が分かることによって悪い結果をもたらした原因を知り、「神によって正しいと認められた行

動」をとることによって悪い結果を解消することが出来れば、悪い結果をもたらしていた行動を『矯正』出来たということになり、「神によって正しいと認められた行動」が聖書で言う義に相当するなら、我々の行動は『義に導かれた』ということになる。したがってまた、その義と現実には正しいと認められている行動との共通性から「神によって正しいと認められた行動」が聖書によって発見出来ることにもなり、聖書は『義の訓練のために有益』ということになる。したがって、さらに次の仮説を立てることが出来る。「聖書に書かれている物語には、我々が現実の様々な状況でよりよく生存する上で意識することが必要な、すなわち神から求められている正しい行動が義として聖書の物語の文脈の中に散りばめてある。」すなわち、聖書に書かれてある義はあくまでも聖書の物語の文脈の中での意味をもって書かれていることは重要である。そうであっても、現実の文脈の中で求められている正しい行動との表現の共通性から聖書の物語とは別の現実の文脈の中での意味をもった正しい行動や教えを発見出来るということである。これ以降、聖書の文脈の中での義に相当する現実の中で神から求められている正しい行動を正義という事にして、同じ表現ではあるが、聖書において神から認められている正しい行動と現実において神から求められている正しい行動とを区別することにする。そして、さらに以上の議論は「神が正しいと認めている行動は、本来我々人間に好ましくない結果をもたらさない」ということが前提となっていることを指摘しておく。

2.3 検証すべき仮説

聖書はローマ人への手紙 11 章 36 節で「すべてのものは神から発し、神によってなり、神にいたる」といっている。もし、これが現実なら神はさまざまな意図に基づいて人間に要求する正義の流れを人間の応答に応じて作り出していること

は十分考えられる。したがって、最終的に次のような仮説を立てることが出来る。

「聖書を参考にしながら、現実の中で神が要求する正義の流れを発見することができ、したがってまた、それに対応する人間の側の応答である現実の流れが存在する。」一方、これに対して理神論 [3] という考え方がある。これは神は天地創造の最初だけ関わっていて、後は天地が神から与えられた自然法則にしたがって自分で変化しているとする考え方である。しかし、ローマ人への手紙 11 章 36 節を考えるとむしろ神は常時この世界に介入していると考え、どのような介入の仕方があるか我々の思惑や意図を超えた現象との関連や、さらに人間が神秘や不思議と感じる現象を合理的に理解することが必要ではないかと思われる [4]。本論文では神は絶えず介入しているという立場をとる。このことは科学の原則に従う方法論で十分に検討されなければならない。

3 3つの具体例

以下に3つの具体例を用いて聖書の聖句の現実の中での意味（現実の中で神によって求められた、あるいは求められている正義の内容）に関する仮説、それらの正義をつじつまを合わせ整合をとることによって推定された神の意図とそれに基づく正義の流れに関する仮説とさらにその仮説に対する人間の側の応答として発見される現実の流れに関する仮説を明らかにする。各節での神が人間に求める正義の流れに関する仮説における文章中の太字体の○で囲った数字は聖句の現実の文脈の中での意味（正義）に対する仮説における該当する聖句を表す。

3.1 悔い改めと科学の時代

聖句の現実の文脈の中での意味（正義）に対する仮説

①それは、私たちのすべての罪を赦し、（コロサイ人への手紙 2 章 13 節）いろいろな定めのために私たちに不利な、い

や、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘付けにされました。（コロサイ人への手紙2章14節）」

仮説：神はイエス・キリストを十字架にかけることによって、人類の今までの罪を赦し、罪に伴う負債を帳消しにしてくださった。

②「その名によって罪の許しを得させる悔い改めがエルサレムから始まってあらゆる国の人々に述べ伝えられる。（ルカの福音書 24章47節）」

仮説：それ以降の新たな罪は人々が悔い改めを行うことによって許され、それはエルサレムから始まり、すべての国の人々に伝えられていく。

③「神は無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。（使徒の働き 17章30節）」

仮説：悔い改めをするためには悪い結果の原因を分かる必要があります、神は我々人間が因果関係が分かるようになるまで待っておられたが、今はすべての人々が因果関係が理解できるようになりすべての人に悔い改めを命じている。

④「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するためです。（エペソ人への手紙 4章13節）」

仮説：神は我々人間が悔い改めを続けてゆくことによって、霊的にイエス・キリストの身丈にまで成長することを求めている。

神が人間に求める正義の流れに関する仮説

神は御子イエス・キリストをエルサレムで十字架にかけることによって人類のそれまでの罪による負債を帳消しにしてくださった①。そして、課題はこれからの

罪をどうするかということであった。神は新約聖書を編纂させ1500年頃からそれまでのギリシャ語からドイツ語の翻訳をルターに行わせることによって、聖書を通して広く悔い改めを世の中に伝えた②。神は聖書で語った悔い改めを理解させ実行出来るようにするために、系統的に物事を考えることを知らなかった人類に彼らの好奇心に任せてまず大航海時代を経験させ因果関係が実感できるようにさせた。そして、悔い改めが出来るようになるためには、悪い結果をもたらしている原因を明らかに出来ない悪い結果を改められないから、まず悔い改めの本質である因果関係を理解させるために1600年くらいから科学の方法論を学ばせ始めた。そして、神は我々が客観的世界や生体における因果関係や心や精神における因果関係を制御できるようになってきたのを見て、人間の臓器を交換できるようにすることで人間の本質は霊である事を分からせつつあり、これからは霊を原因とした因果関係を考えることが出来るようにしつつある。この事によって神は我々が本格的な悔い改めが出来るようにさせつつあり③、最終的に霊的にイエス・キリストの身丈にまで成長することを求めている④。

正義の流れに対応する現実の流れ

イエス・キリスト以降新約聖書が書かれ編纂され、その中で悔い改めが伝えられたが、1500年までギリシャ語で一部の人のものであった新約聖書が、ルターによってドイツ語に翻訳され、さらにその後英語にも翻訳され、広く一般大衆に読まれることによって悔い改めの概念も世界中に伝えられていった。

さらに1600年までは人類は彼ら自身の好奇心に基づいた大航海時代を通じて航海技術を習得することで様々な事柄の動きや力の働きを実感し、星の動きを観察し力の働きに関して因果関係が実感できるようになった。また、地球上のすべての地域に到達し始めた。

1600 年以降、人類は科学の方法論を学ぶ事によって科学の時代が始まり因果関係を学び始めた。まずは物理学の発展により客観的世界の因果関係を知ることによって因果関係がどういうものであるかを理解した。次に心理学の発展により心に原因がある場合の因果関係、精神医学の発展により精神に原因がある場合の因果関係を知り、そのことで我々は不適切な行動の心や精神における原因を知り心の持ち方や精神を正す事で、不適切な行動を改めることが出来るようになった。そして、今や人間の臓器を取り替えることが出来るようになりつつあり、人間として肉体のみならず霊も考えなければならない時代に入ってきており [5] これからは霊に原因がある場合の因果関係が悔い改めの課題になると考えられる。そして、客観的現実、人間の肉体、心、精神や霊に原因がある場合の悔い改めを続けてゆくことによって最終的に霊的にイエス・キリストの身丈にまで成長することになる。

3.2 命に至る小さな門と非軍事的安全保障

聖句の現実の文脈の中での意味（正義）に対する仮説

①「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。（ルカの福音書 22 章 29 節）」

仮説：神は人々に主権を与えた。

②「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます（マタイの福音書 26 章 52 節）」

仮説：主権を与えられた以上、主権のない兵として貢献する軍事的安全保障でなく、主権者として貢献する非軍事的安全保障でなければならない。

③「さあ、安心して住んでいるのんきな国に攻めのぼれ。そこには扉もなく、門もなく、其の民は孤立して住んでいる。（エレミヤ書 49 章 31 節）」

仮説：他国に脅威を与えない安全保障は必要であると言っている。

④「滅びに至る門は大きく、その道は広く、そして、そこから入ってゆく者が多いのです（マタイの福音書 7 章 13 節）」
「命に至る門は小さくその道は狭くそれを見出す者はまれです（マタイの福音書 7 章 14 節）」

仮説：神の計画と警鐘を読み取り、問題を早期に解決してゆく試みは始まったばかりであり小さく細々としている。しかし、その試みを続けてゆくなら、やがてそれは日本の安全を守り、人類全体の安全を守る事が出来るようになる。

⑤「人々が平和だ、安全だと言っているその様な時に、突如として滅びが彼らに襲いかかります（テサロニケ人への手紙第一 5 章 3 節）」

仮説：自分たちの主権を発揮せずに得られている安全や平和はもろいことを言っている。

⑥「争いの初めは水が噴き出すようなものだ。争いが起こらないうちに争いをやめよ。（箴言 17 章 14 節）」

仮説：主権者として貢献する非軍事的安全保障とは早い段階で争いを解決する安全保障でなければならない。

⑦「ただ、全ての事を適切に、秩序を持って行いなさい（コリント人への手紙第一 14 章 40 節）」

仮説：人類史から人類全体に課せられた神の計画を、またそれぞれの地域の歴史からそれぞれ地域に課せられた神の計画を見出し、全体と各地域がお互いにすり合わせをすることで矛盾や対立のないようにしながら実行してゆきなさいと言っている。

⑧「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすればこれらの物はすべて与えられます（マタイの福音書 6 章 33 節）」

節)」

仮説：神の計画を知り、社会がその計画から外れた場合に生じる警鐘の意味を読み取り広く社会に伝えてゆく事をまず始めれば、争いが起こらないうちに争いを解決できるようにすると言っている。

⑨「自分に関係のない争いに干渉する者は、通りすがりの犬の耳をつかむ者のようだ（箴言 26 章 17 節）」

仮説：軍事的な集団安全保障は争いを解決するどころか、争いを拡大しかねない危険性がある事を私たちに教えている

⑩「主はご自分の道を私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。

（イザヤ書 2 章 3 節）

仮説：そして、人類全体に課せられた神の計画を一人一人の人生において主権者として実行してゆきなさいと言っている。

神が人間に求める正義の流れに関する仮説

1. 神は 19 世紀を通して我々に主権を与えた①。その事は同時に神は主権のない兵として貢献する軍事的安全保障から主権者として貢献する非軍事的安全保障への移行を人類に求めることをも意図していた②。

2. 1945 年第二次世界大戦が終了するまでは軍事的安全保障が一般的であり多くの人が犠牲になった。しかし、他国に脅威を与えない安全保障は必要であり③それ以降神は日本に敗戦後しばらくアメリカに基地を提供することで核抑止と軍事的な部分をアメリカに依存した日米間の軍事的集団安全保障を許し、戦争に加担することなく経済的繁栄を経験させることで、世界の潮流である核兵器所有と軍事的安全保障とは別の小さな門を作らせ始めた④。

3. しかし、いつまでも軍事的部分をアメリカに依存したままの安全保障による経済的繁栄に安住しないよう⑤、小さな門を開け始めた。すなわち、2010 年頃から神はア

メリカを民主主義の守護者と世界の警察官の役割から後退させる事によって、日本に対して安全保障に関して全面的に主権在民の時代にふさわしい主権を発揮するよう求め始めた。

4. 神は日本に永遠の命にいたる狭く見つけにくい道を進むことを求めている。

それは神の計画と警鐘を読み取って、生じている問題の神の計画に向けての意味を読み取り、問題を早期に解決してゆく非軍事的安全保障をとることであり⑥⑦、神は我々にその道を歩むなら非軍事的安全保障のために力を貸すと言っている⑧。

5. 神は政府に日米安全保障条約を通した軍事的集団安全保障や軍事的集団的自衛権への道を開かせることで、主権者が主権のない兵として酷使され消耗する事態にならないように⑨、今までの軍事的安全保障から主権者の一人ひとりの人生と生活を通した非軍事的安全保障の実践に向けての小さな流れを起こそうとしている⑩。

正義の流れに対応する現実の流れ

1. 19 世紀人類はフランス革命や明治維新を通して主権を獲得した。

2. その後、第一次世界大戦、第二次世界大戦を通して人類は軍事的安全保障をとり続け長崎・広島原爆をはじめ多大な惨禍を経験した。その中で日本は敗戦を経験し、戦争、武力を国際問題の解決の手段として用いないとする憲法を持った。しかし朝鮮戦争をきっかけとして安全保障の必要性が認識され専守防衛に徹した警察予備隊を発足させた。民主主義という価値を共有するアメリカと日米安全保障条約を結び、基地を提供する代わりに核抑止力と軍事的な部分はアメリカに依存した軽武装専守防衛安全保障策で経済的繁栄を享受してきた。

3. しかし、アメリカが民主主義を守る世界の警察官としての地位から後退し始めることによって、日本は世界に対して全面的に安全保障に関して主権を発揮せざるを得ないことになった。

4. 尖閣諸島問題が有事となった場合には米国は日米安全保障条約で日本の尖閣諸島を守らなければならない。これは米国の日本に対する集団的自衛権という事になる。

5. したがって、日本も主権国家として何らかの形で米国に対して集団的自衛権の責務を負わなければならない双務性が【本来は】あるだろう。日本はその責務を負わない代わりに米国に基地を提供してきた。しかし、それでも対等でないことは日米地位協定の不平等さとそれに基づく沖縄の悲劇に端的に表れている。

6. そういう意味では、我が国は集団的自衛権や集団安全保障において軍事手段も使えるようにしようとする動きは国家の主権という観点だけから言えばありうる。

7. しかし、現在は国家に主権があるのみならず何よりも国家の構成員である国民に主権がある時代である。重要なのは軍事的な集団的自衛権や集団安全保障は主権在民の時代にふさわしく国を守れるのかという点である。争いを解決するどころか争いを拡大し、主権者を主権のない兵として酷使し消耗する危険性があるのではないかという点である。

8. したがって、安倍政権によって軍事的な集団的自衛権や集団安全保障が憲法解釈によって使えるように事態が進んでいる以上、これからやらなければならない事はこれらの安全保障が必要な事態が生じないようにするという事である。その為には問題が争いになる前に問題を解決してゆかなければならない。

9. それが時代の流れを理解して、問題が生じた時点で、問題が争いにまで拡大する前に問題の時代の流れに向けての意味を読み取り、時代の流れに向けて問題を早期に解決してゆく方向であり、国際社会と広く共有しなければならない。これを非軍事的安全保障とし、国際社会では多分に軍事的安全保障が主流である現状を鑑みて、日米安全保障条約と専守防衛的安全保障で維持してきた抑止を出来

るだけ変えないようにしながら、非軍事的安全保障を中心に位置付けて、しかも非軍事的安全保障政策で本当にやって行っているのかをよく注意しながら、非軍事的安全保障政策を採用しなかった場合の損失の大きさもよく考慮しつつ、国際社会で非軍事的安全保障が一般的になるまでやるべきである。

3.3 過ぎ去った時代と環境問題の時代

聖句の現実の文脈の中での意味（正義）に対する仮説

①「過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。（使徒の働き 14 章 16 節）

仮説：環境問題が生じてくるまでは、神はすべての国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許していた。

②「とはいえ、ご自身のことを証ししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなた方の心を満たしてくださったのです。（使徒の働き 14 章 17 節）」

仮説：したがって、人間は一見自分で生きてきたように見えるけれど、実はそうではなく、神が雨を降らせ、それによって様々な実りが与えられ、そのことによって食物を与えられ、喜びで心を満たされてきたのである。そして、また、私達も恵みの雨や様々な実りや食物に神の恵みを感じ感謝してきたのである。

③「主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。（詩篇 33 章 10 節）主のはかりごととはどこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。（詩篇 33 章 11 節）」

仮説：ところが環境問題を迎えさせて神は人類が作り上げてきた今までの文明や教育を支えてきた旧概念エネルギーを弱め拡散させ、今までの文明や教育の在り方を問おうとしている。そして、環境問

題を解決する方向に新概念エネルギーを時間をかけて集中させ始め[2]、そこに環境保全や持続発展可能な方向を時代の流れとして打ち立てようとしている。

④「あなたは自分を生んだ岩をおろそかにし、生みの苦しみをした神を忘れてしまった。(申命記 32 章 18 節) 飢えによる荒廃、災害による壊滅、激しい悪疫、野獣の牙、これらを地をはう蛇の毒とともに、彼らに送ろう。(申命記 32 章 24 節)」

仮説：神は科学技術文明を与えた神のことを思わず、化石資源等を生産してきた神のことを忘れた人類の経済活動を鑑みて、アフリカにおける飢餓、自然災害による被害、伝染病の蔓延、過激派によるテロを引き起こし、さらにはこれらの文明を支えてきた旧概念エネルギーをも拡散させ始めた。

⑤「隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし、現わされたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。(申命記 29 章 29 節)」

仮説：我々は今までは我々の思惑や意図を超えて神から与えられた時代の流れを意識せずにやってきた。しかし、これからは人類は子孫に至るまでもこれらの時代の流れを意識し、自ら読み取ることによって、環境保全を維持しながら、持続発展する方向を目指さなければならなくなってきた。

神が人間に求める正義の流れに関する仮説

1. 神は当初は、あらゆる国の人々が主権国家の問題は自らが解決する内政不干渉を認めてきた①。
2. しかし、神は我々人類に恵みの雨を下さり、実りや豊穡な収穫を与えてくださることで神の働きと人類への愛に気付かせてきた②。

3. そして、神はさらに現代文明の根幹である科学技術文明を神が与えてくださったことや、石炭・石油等の化石資源が神の労働によることを人類が認識していない現状を鑑みて、それらを人類に認識させるべく伝染病の流行、飢餓の広がり、過激派の存在、異常気象による災害等を引き起こし、さらに今までの文明を支えてきた旧概念エネルギーの拡散をはじめた。特に神は軍事的安全保障や相互確証破壊を支えてきた「問題を解決するために人を脅し殺す」旧概念エネルギーを拡散させ弱め始めている[6]④③。

4. そして、神は化石資源の枯渇から我々に環境保全の必要性を分からせ始めた。一方、持続発展可能な開発をもう 1 つの向かうべき方向として示し始めた。そして、環境保全を維持することを目的としながら、持続発展する方向を目指すことが神のご計画であることを示し始めた。さらに人類に主権のない兵として貢献する安全保障を克服させるために「問題を解決するために人を育て活かそうとする」新概念エネルギーを時間をかけて集中させようとし始めている[6]③。

5. 今まで神はご自分の計画を私たち人類に分からせることはなく、ただ、神が与えてくださったものを我々人類に感謝させ喜んで受け取らせてきたのだが、神は 19 世紀後半からフランス革命や明治維新を通して我々に主権を与えさらに我々人類に神のご計画を気付かせ、子々孫々に至るまで人類自らの主権で神のご計画を発見しそれに従って歩む(神の主権に入る)ことを求め始めている。そして、そのことで自然環境自体も持続発展的に変えようとしている⑤。

正義の流れに対応する現実の流れ

1. 環境問題が生じてくるまでは、あらゆる国の人々が主権国家の問題は自ら解決する内政不干渉を旨として歩んできた。
2. しかし、我々人類は神を意識しなかったわけではなく、恵みの雨を下さり、実りや豊穡な収穫を与えてくださった神

さまに感謝と喜びを表す祭りを行ってきたし、また、食前の祈り、収穫の祈りなどを行ってきた。

3. そして科学は神の世界をよく知るためにはじめられたが、可視的な対象を取り上げるため神を考察の対象に出来なかったし、あまりにも可視的な世界を矛盾なく説明でき、物を動かすことが出来たため、神は存在しないと考える事にもなった。そして、科学・技術は暴走しているとまで言われるようになった[7]。また、我々の経済活動では例えば石油の場合、人間の労働による掘削、精錬、輸送、備蓄には価格を考えるが、それ以前の石油になるまでのプロセスには価値を考慮してこなかった。そして、鳥インフルエンザやエボラ出血熱等の流行、アフリカ等での飢餓の広がり、過激派によるテロ、温暖化の影響と思われる異常気象による災害、東北大震災による福島第一原発や周辺住民の生活等の壊滅が生じてきている。さらにギリシャ、エジプト、イラクで混乱が始まり今までの文明を支えてきた旧概念エネルギーの拡散が始まった様に見える。特に最近では「問題を解決するために人を殺そうとする」旧概念エネルギーの拡散の影響[6]と思われる事象が一般社会の中で散見される。

4. 一方、公害問題からはじまって資源収奪、廃棄物投棄に対する環境保全の必要性が考えられ始めた。また、1984年に日本の提案で国連に設置されたブルントラント委員会で持続発展可能な開発が向かうべき方向として示された。そして、これらの方向から環境保全を維持することを目的としながら、持続発展する方向を目指すことが時代の流れとして見え始めてきている。

5. 今までは我々人類はこの様な時代の流れを意識することはなかった。これから我々は子々孫々までこの時代の流れを意識し、主権国家や地域の歴史からもこれらの時代の流れを読み取り、相互に、そして、環境保全を維持することを目的としながら、持続発展する方向というグ

ローバルな流れと矛盾しないようにすり合わせをしながら、主権者一人一人が自分の人生を通してこの方向を歩まなければならないとなった。

そして、マタイの福音書6章33節、マタイの福音書7章14節、詩篇33章11節、申命記29章29節とはこれから実現されるべき言葉ということになる。

4 まとめ

以上で、現実には様々なところで神から求められている正義が存在し、その正義は聖書の聖句を参考に見出す事が出来ることが分かった。そして、それは神が要求する正義の流れとして存在すること、さらにそれに対する人間の側の応答である現実の流れが存在することを確認できた。したがって、2.3で述べた仮説「聖書を参考にしながら、現実の中で神が要求する正義の流れを発見することができ、それに対応する人間の側の応答である現実の流れが存在する」を確認できたことになる。また、これらのプロセスは日常的な言葉でいえば、現実の問題意識を持って聖書を読むと、聖書はその様な問題意識に応じてそれを解決しうる聖句を意識させる。そして、その聖句は聖書の文脈での意味から離れて、現実の文脈での意味を持ち始めるということになる。

この論文でやったことは聖書解釈ではないという点は重要である。聖書解釈というのは今まで聖書の専門家が聖書原典をもとに造り上げてきた物語（現実である部分もあり、空想である部分もあり得る）と考えられる。それに対してここではその物語の文脈の中にある義を現実の文脈の中で必要とされていた（る）正義を発見するのに参考に出来るということをも明らかにしたということである。

5 考察

5.1 検証について

ここでは本論文で行った検証のやり方について考察する。この見出された正義の流れが本当に神の意図に基づく正義の流れなのかという点について、これを発見する思考の過程を考察すると、基本的には現実に対する問題意識からそれを部分的に説明する正義が帰納され、それをより広い現実には演繹して、その正義が全体として当てはまる現実が発見されるという過程を繰り返して、矛盾のない一つの正義や現実の流れに至っているということ、さらに一つの正義の意味がその前後の流れの意味に対して矛盾がなくむしろその意味を補強するのに役立っていること、さらにほかの流れとの間で整合性があるということによって現実の流れに合わせた聖書からの我田引水的な聖句の引用ではないと考えられる。したがって神の証言による直接的な検証ではないが、間接的な検証の意味は十分にあるといえる。しかし、究極的には著者がヒヤリハット現象に関する論文で明らかにしたように、我々が本来認識すべきことを認識していないと完全合理性に基づいた内容で警鐘を受ける可能性がある[8]。そういう観点からこれらの仮説を考えると、これらの仮説は本来認識していなければならないことであるから、正しければ警鐘を受けないし正しくなければ警鐘を受け、警鐘を受けている認識を取り入れ仮説を修正することによって警鐘がやむことにより仮説の検証が出来ることになる。次にこの3つの事例で一般性が成立するかという問題がある。この点が実験室科学の場合の検証と一般社会での検証とはかなり違いまた極めて重要なところでもある。実験室科学の場合は実験結果に大きな影響を与える条件は一応実験者（仮説を検証しようとする者）のコントロール下にあるということが前提である。すなわち、いつでも誰でもどこでも同じ実験条件をそろえることが出来れば再現することを前提としているため、2回以上同じ実験条件で再現性があれば、それ以

降は同じ条件さえ整えることができれば社会（実験室外）でも再現することが保障されると考えるのである。大量生産はこの原理に基づいて実現できているのである。それに対して一般社会全体に関する仮説（例えば、本論文の「正義の流れ」や「社会変革の一般的構造[9]」、マルクスの「歴史発展の必然性」等）の場合は仮説を検証しようとする者は仮説の結果に重要な影響を与える条件を全てコントロール下におくことは出来ないということを経験とすべきと思われる。すなわち、検証者にとって思いがけない事態がありうるという事である。そのことによって演繹できた具体例が多ければ多いほど仮説の正しさの信頼性は高まるが、基本的には確認した具体例でのみ正しさが検証されたということになる。したがって、検証すべき次に起こる具体的事象に対しては仮説を信頼するあまり現実を仮説どおりにしてしまわない慎重さが必要と思われる。本論文の「正義の流れ」の場合も現在まで正しさが検証されたのであり、未来のことについては同じ注意が必要である。さらにもう一つ重要なことは一般社会では実際に行動しなければ検証できないということである。行動は人生、生活の一部であり実験室のように試行というわけには行かない。実際に事態が非可逆的に進んでしまうのである。したがって、一般社会で仮説を検証する場合には、仮説が間違っている場合のリスクと仮説が正しい場合にその仮説を採用しなかった損害の大きさを考慮しながら実行してゆくということになる。しかし、現在はこれらのことを議論するにはあまりにも事例が少ない。これらの問題も議論する場が必要である。

5.2 神の名について

筆者は科学的な議論をする時は神の名を用いるべきではないと考えているが、ここでは神の名を用いて議論した。その点について考察する。神から発せられた働きは幾つかの段階を経て人間に達して

いる場合が考えられる。この時、この働きの過程における構造を論じる時には例え神から発した働きであっても神の名は必要ないと考えられる。しかし、その様な働きを発している意図を問題とするときには誰が発信者かを問題にしなければならない。これが今回神の名を用いて議論した理由である。今回ここで議論の対象としたのは現実求められている正義であり、その正義を誰がどのような意図で要求したのかということが問題だからである。この意図を知ることによって、我々人間が行わなければならない正義の目的を知ることが出来るからである。また、神の意図の正しさの判断はあくまでもそれが現実であるかどうかによるのであって、神の権威に基づいてはならないということがある。これが科学とは別に神の意図を仮説、過去、現在の現実に基づく検証によって神の意図に関する仮説の正しさを検討する場が必要な理由である。

5.3 聖書の物語性について

「2.1 聖書のまとまりの良さ」のところで、筆者は聖書は物語であるという仮説をたてた。これはこの物語の中に現実であったり空想であったりしている所があるかもしれないがとりあえずはそれを問題にしないという意味である。すなわち、まさに聖書で言う現実に要求されている正義を見出す訓練のためには、物語のどの部分が現実であり、どの部分が空想であるかを区別する必要はないと考えられるからである。要するに、聖書の記述のすべてに関して現実であると検証できるまで聖書を手に取らないという残念な事態を避けたいと思うと共に、現実働いている正義を発見するためには聖書の物語を知っておく必要があるからである。その事によって聖書の物語の中にある義を参考にして、表現の共通性によって現実の中で神によって求められている正義を発見（意識）できるからである。

本論文は現実の中で神によって求められている正義や教えを発見し、我々の行動が不適切な結果をもたらしている場合、我々の行動の正義や教えからのずれを認識し、我々の行動を適切に修正し、適切な結果を得ることが目的である。聖書に書かれている事の内、どの部分が現実でどの部分が空想かは科学の原理に従った新たな方法論で検討する必要がある。

参考文献

- [1] エティエンヌ・シャルパンティエ：「旧約聖書の世界への旅」，サンパウロ，1996年
- [2] エティエンヌ・シャルパンティエ：「新約聖書の世界への旅」，サンパウロ，1997年
- [3] 石井正治郎：『使徒信条』の学び，つのだえ社，pp.38-39
- [4] 安平哲太郎：「完全合理性と限定合理性」 情報知識学会，Vol. 19, No. 2, pp. 195-pp. 211, 2009年
- [5] 安平哲太郎：「歴史的残骸の中の誤謬が創造的知識獲得の予兆であるための条件について —科学的思考に伴う誤謬についての一考察—」 第35回日本創造学会全国大会，pp. 44-pp. 48
- [6] 安平哲太郎：「相補性モデルの一形態 —黄金数を解とする方程式が意味するもの—」 情報知識学会誌，Vol. 24, No. 2, pp. 147-pp. 157, 2014年
- [7] 市川惇信：「暴走する科学技術文明」，岩波書店，p. 317, 2000年
- [8] 安平哲太郎：「ヒヤリハット現象の背景と解釈に関する仮説と検証」 情報知識学会，Vol. 21, No. 2, pp. 226-pp. 237, 2011年
- [9] 安平哲太郎：「社会変革の一般的構造」 情報知識学会，Vol. 20, No. 2, pp. 103-pp. 110, 2011年